聖書にある「壁」の寸法

エゼキエル書	40:5 見ると、神殿の周囲を囲んでいる外壁があった。その人は六アンマの測り竿を手に持っていた。ここでいう一アンマは、普通のアンマに一トファを加えた長さである。彼がその**壁を測ると、その厚さも、高さも一竿であった。**
	41:2 入り口の幅は十アンマ、**入り口の両側の壁の幅はこちら側が五アンマ、あちら側も五アンマであった。**拝殿の奥行きを測ると四十アンマ、その横幅は二十アンマであった。
	41:3 内部に入って、次の入り口の脇柱の厚さを測ると二アンマ、その入り口自体の幅は六アンマ、**入り口の両側の壁の幅はそれぞれ七アンマであった。**
	41:5 彼が神殿の**壁の厚さを測ると六アンマ**、脇間の幅は四アンマで、神殿の周囲を囲んでいた。
	41:13 神殿を測ると、奥行きは百アンマであり、神域と別殿の奥行きとその**壁の厚さを合計すると百アンマであった。**
	42:20 彼は四方を測ったが、**外壁は**全体を囲んでおり、**その長さは五百アンマ、幅も五百アンマであった。**それは、 聖なるものを俗なるものから区別するためであった。
ヨハネの黙示録	21:17 また、**城壁を測ると、**（その高さは）**百四十四ペキスであった。**これは人間の物差しによって測ったもので、天使が用いたものもこれである。 →欽定訳：And he measured the wall thereof, an hundred and forty and four cubits, according to the measure of a man, that is, of the angel. →聖書協会共同訳：また、城壁を測ると、百四十四ペキスであった。これは人間の尺度であって、天使が用いたのもこれである。 →口語訳：また城壁を測ると、百四十四キュビトであった。これは人間の、すなわち、御使の尺度によるのである。 →回復訳：彼がその城壁を測ると、人の尺度、すなわち御使いの尺度で百四十四キュビトであった。 →都そのものは、一万二千スタディオン（≒185m→2,220 km）の高さの山ですが、城壁は、土台から頂上まで百四十四ペキス（＝アンマ≒45 cm→約 64.8m）です。

【参考】黙示録 21:17 の「百四十四ペキス」が 城壁のどこの寸法を指しているのか

１．壁の高さと解釈する場合

文脈的に、新しいエルサレムの 城壁の大きさを記しているので、高さを指していると考えるのが自然である（幻にしても、壁の厚さは壁の上に立たないと計れないので現実的でない）。欽定訳などでは「the wall」を測ったと書かれているため、「壁の高さ」と解釈する人が多い。

144 キュビット（約 64.8 メートル）は新しいエルサレムの大きさにしては比較的低いように思えますが、これは物理的な防御よりも象徴的な意味を持っていると思われます。

２．壁の厚さと解釈する場合

黙示録 21:16 では、新しいエルサレムの都市のサイズが「長さ、幅、高さが同じで、12000 スタディオン（約 2,220km）」と記されており、もし城壁の高さが 144 ペキスなら、都市のサイズに対して異様に低く感じられる。そのため、144 ペキスは城壁の厚さを指していると考えられる。

以上、１、２のどちらの解釈も可能と思われるが、個人的には「高さ」と考えるのが一般的であり、自然である。

NO COPY H.Taniguchi